様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３５４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５３２５７

研究課題名（和文）喪失のケアに携わる、音楽によるスピリチュアルケア実践者養成のための基礎的研究

研究課題名（英文）A basic research for the training of the spiritual care practitioner using music to engage in the care of the loss

研究代表者
里村　生英（SATOMURA, Ikue）

エリザベト音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：９０２３５４３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：　「リラ・プレカリア(祈りのたて琴)」プログラム(一般社団法人日本福音ルーテル社団主催、以下LPと略)の参与観察と資料収集を行い、スピリチュアルに主眼を置いた、プログラムの根幹理念、養成講座のカリキュラム構造、及び、実践活動への反応を明らかにすると共に、これらの結果を、現代のスピリチュアリティの学術的論考に照らしながら、今後の日本の喪失・悲嘆のケアの場で、音楽を介してスピリチュアルケアサービスを行う、実践者養成のための課題を考察した。また、この分野における、現代の先駆的実践モデル－ミュージック・サナトロジー－を扱った文献の翻訳を行った。
　研究の成果は、学会にて発表され、翻訳は出版予定である。

研究成果の概要（英文）：　I clarified, through a participant observation and the document collection into the Lyra Precaria (inori-no-tategoto) program sponsored by Japan Evangelical Lutheran Association, the foundational orientation, the curriculum structure of the training lecture, and responses to the practice activity, which are intended to be spiritual. And then, lighting up these results for the academic discussion on spirituality of the modern period, I considered problems for the practitioner training to serve people spiritually in/with/through music at a place of the care of the loss and grief in the near future Japan. In addition, I translated an important book which treated with pioneer practice model - music thanatology - of this field in the present age.
The results above were reported in the conferences of several societies, and the translation is going to be published.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：スピリチュアルケア　祈りとしての音楽(ハープと歌声)　喪失・悲嘆　パストラル　社会奉仕実践　人材開発・養成教育　サナトロジー（死生学）　詩編

１．研究開始当初の背景

本研究は、現在の日本におけるスピリチュアルケアの課題状況－スピリチュアルケア自体の概念が未成熟であること、また、その方法論である音楽の使用原理と有効性についての研究が、実践者の経験のみに準拠して発展性に乏しい状態にあること－に鑑み、スピリチュアルに主眼を置いて活動と養成教育を行っている、「リラ・プレカリア(祈りのたて琴)」プログラム（一般社団法人日本福音ルーテル社団主催）に注目し、その実地調査を通して、スピリチュアルケアの概念、音楽による方法論的原理、及び、音楽によるスピリチュアルケア実践者養成のための課題を探求することを目的として計画された。

２．研究の目的

「リラ・プレカリア」プログラムにおける養成講座の実地調査（参与観察、資料収集、インタビュー調査）を行い、プログラム理念とその理論的根拠、養成講座のカリキュラムの構造、及び、社会における実践活動に対する反応を、体系的に明らかにすることによって、プログラムの根幹にあるスピリチュアルケアの概念、ならびに、音楽によって喪失や苦悩に寄り添い、スピリチュアルな変容に拓かれるための方法論的原理を明らかにすることを目的とした。

また、これらを通して、今後、日本の喪失・悲嘆のケアや終末期ケアの場で、音楽を介して寄り添い、スピリチュアルな体験をもたらすことをめざすサービスを実践する、音楽によるスピリチュアルケア実践者養成のための課題を、スピリチュアルケアの学術的動向に照らして、考察・提言することを視野に置いた。

３．研究の方法

本研究は、スピリチュアルケアの本質的概念、方法論、その臨床適用状況の解明、及び、実践者養成における課題抽出のために、文献研究と実地研究の両方の手法を用いた。

（１）文献研究

①緩和医療及び終末期医療分野からのスピリチュアルケアへのアプローチに関する文献のほか、社会学、神学、宗教学、人類学、及び教育人間学分野において、スピリチュアリティ、スピリチュアルケアを扱う文献を収集し、主として、スピリチュアルケアとは何か、何を根本原則とすべきなのか、どういう目的と文脈で必要とされるのかに焦点を当てて講読した。現代のスピリチュアリティへの注目を反映して、1970 年代以降の文献が中心となった。

②米国文献：*Music at the End of Life: Easing the Pain and Preparing the Passage*(J.L.Hollis 著)の翻訳によって、この分野における、現代の先駆的実践モデル－ミュージック・サナトロジー－の全体像を探究すると共に、日本における「リラ・プレカリア」の臨床現場への導入課題と現場スタッフの反応を比較検討した。

（２）実地研究

「リラ・プレカリア」プログラムの実地調査は、以下の方法で行った。

①プログラムの設立経緯及び現在の運営状況についての調査…議事録の閲読と、当時と現在の事務担当者(計 3 名)への口頭ならびに書面インタビュー。

②養成講座の調査…参与観察ならびに講義・演習資料の収集。

③社会活動の調査…活動現場の参与観察ならびに実践者と実践受入れ施設責任者へのインタビュー(計 10 名)。

なお、参与観察、資料収集、ならびに、インタビューに際しては、いずれも、書面と/あるいは口頭で、研究の趣旨と倫理的誓約内容を説明し、プログラム主催者及びプログラム・ディレクター、現場管理者、実践者、参加者・協力者の同意を得て行った。

４．研究成果

研究の成果は、（１）「リラ・プレカリア」養成講座の参与観察と資料及びデータ収集の成果、（２）「リラ・プレカリア」の社会における活動に対する反応の調査成果、（３）両者と日本のスピリチュアルケア分野の学術的および実践状況とを照らし合わせての、実践家養成の課題考察の成果、という 3 つの点において示される。

（１）まず、「リラ・プレカリア」養成講座の参与観察と資料(紙媒体資料及びインタビュー・データ)収集の成果である。

①「リラ・プレカリア」の概要については、その意味、すなわち、ラテン語でリラはハープを、プレカリアは祈りを意味し、病床にある方、さまざまな問題で悩み苦しむ方に、ハープと歌による生きた祈りを届けるプログラムであること、また経緯については、アメリカ福音ルーテル教会から日本福音ルーテル教会へ、「リラ・プレカリア」プログラムのディレクターとして派遣されている、キャロル・サック女史の主宰のもと、日本福音ルーテル教会からプログラム委託を受けた日本福音ルーテル社団が主催となり、ルーテル学院大学の「人間成長とカウンセリング研究所」の協力を得て、2006 年に創設されたことが明らかになった。

プログラム設立の背景には、主催団体の理念、特に、キリスト教的スピリチュアリティ－死後のいのち、すなわち神の国へ入ることへの希望、マタイ福音書の御言葉の実践、神の無条件の愛のメッセージ－の存在と、社会

への貢献活動として、ホスピスに代表される、エンドオブライフ期にある人とその家族に対するケアへの強い意識があったことが見出された。

②「リラ・プレカリア」プログラムの趣旨は、“私はここにいます、あなたは一人ではありません、あなたは大切な人です”という人間の尊厳に関わる、神からのメッセージを、患者のそばで、実践者の存在と、ハープと歌声による祈りの音楽によって伝えることであることが確認された。

また、この本質的理念は、養成講座の種々の講義や演習の基盤をなすと共に、社会における実践活動の目標であることも確認された。

このことによって、「リラ・プレカリア」の意図や働きが、治療や療法ではなく、ベッドわきで、その人を対象にして、ハープと歌で生きた祈りをささげること、つまり、傷や痛みを抱えた目の前の人の“尊厳・大切さを認める”ことであるという、独特のスピリチュアルケア概念が浮かびあがった。

③上記①②を、文字通り“体得”していくために、養成講座では、「詩編」を中心にしたカリキュラムが組まれており、「詩編」の今日的社会学的・神学的解釈に関する講義、各「詩編」を題材にしたシェアリング・サークル及びハープと歌の演習、さらには、1 日 3 時間の祈りの時をもつという課題等によって、2 年間の養成講座が組まれていることが明らかになった。

また、参与観察によって、この養成教育が、スピリチュアルな涵養に主眼を置いたプログラムであることが実感されたことは大きな収穫であった。

しかし、スピリチュアルケアと「詩編」によるスピリチュアリティの涵養とのつながりについては、その神学的意義の検討を含めて、さらなる検討が必要であり、この点は、今後の課題である。

なお、この成果については、学会にて発表を行った。下記[学会発表]の②がそれに当たる。

（2）「リラ・プレカリア」の社会における活動に対する反応の調査から得られた成果は、以下の点が挙げられる。

①「リラ・プレカリア」の養成プログラムは、2013 年 9 月の時点で、20 人の修了生を輩出しており、主催団体が窓口になって、奉仕活動依頼及びセミナー依頼を受け、在宅ホスピスケア対応型集合住宅、病院（緩和ケア部門)、高齢者施設、個人宅等への訪問を支援している。

本調査では、修了生による、高齢者福祉施設におけるプレゼンテーションの取材、東日本大震災被災者支援としてのパストラル・ハープの実践の取材、在宅ホスピスケア対応型集合住宅での実践の取材、そして、実践協力施設・団体管理責任者と実践者へのインタビューを実施した。その結果、

・実践に、養成講座の趣旨と教育内容が反映されている実態、

・実践管理者側に、スピリチュアルな志向性をもったケアであることとその意義の認識があること、

・実践者自身が、実践の意義と自身の成長を自覚していること、

・実践の効果については、対象者に身体的状態の変化（呼吸の安定や表情の柔和)が見られたり、スピリチュアルな深化(新たな境地の深まり等)が観察されたり、加えて、家族や医療スタッフの安堵感や死生観の深まり等が観察されていること、

が明確化された。

②米国文献： *Music at the End of Life* の翻訳によって、米国と日本では、実践の臨床現場への導入課題と現場スタッフの反応に共通性があることが確かめられた。

それは、スピリチュアルな志向をもったケアは、心理療法あるいは宗教的行為として誤解される場合があること、音楽を道具として用いる場合は、活動が、娯楽や気晴らしとして見なされる場合が多々あること、また、現場管理者・責任者に、スピリチュアルケアの重要性の認識がない限り、スピリチュアルケアはたとえ導入したとしてもそのようには機能しないこと等である。

このことから、「リラ・プレカリア」の働きをケア現場や社会につないでいくためには、苦悩からの解放プロセスの理論的枠組みを明確にすると共に、対象者への照会基準や実施方法等、現場での実際的な行為を明確にしていく必要が認められた。この点については今後の重要課題である。

なお、この成果については、学会にて発表を行った。下記[学会発表]の①がそれに当たる。

（3）スピリチュアルケア実践家養成の課題考察の成果は以下の通りである。

①文献ならびに学会出席によって、 内外のスピリチュアルケアの現在の動向について情報を収集し、これによって、日本のスピリチュアルケアが終末期医療に特化している、という状況を把握することができた。このことは、本来、文化・社会、ひいては、普遍的な人間の課題であるスピリチュアルケアが、医療の問題に取って代わられているという状況を示すものである。

このような日本の状況のなかで、「リラ・プレカリア」プログラムの存在は、一石を投じるものであると言える。なぜなら、スピリチュアルな痛み、嘆き、戸惑いを人間の根源的な状態と捉え、その状態において、その人の尊厳を、ハープと歌によって/と共に/の内に、見出そうとする働きであるからである。こうしたリラ・プレカリアの枠組みは、実践者がスピリチュアルケアに向かうときの基本的な姿勢を示唆しており、実践家養成の要

になるとして評価される。
②「リラ・プレカリア」のような、スピリチュアルな志向をもつ実践・働きは、効率や利便性・合理性重視の環境の中では受け入れられにくい。しかしそのことを受け止め、それゆえに、どのような場所で、どのような人に、どんなときに、スピリチュアルな志向をもった働きが、必要とされるのかを見極めていく必要がある。またそのためにも、スピリチュアルケアは一体何をするケアなのか、なぜ必要なのか、何を目指しているのか、を実践者が自覚すると共に、根気強く、社会に向けて説明していく必要があることが課題として認識された。
③上記の課題認識により、スピリチュアルケア実践家養成のあり方もまた、示唆された。つまり、スピリチュアルケアとは何か、自分は何をしようとしているのか、そのためにはどうあるべきなのか、常に今の自分と向き合って、自分自身に問い続けていく“観想的なあり方”が、ケア実践者に必要とされる要件ということである。
現代の教育プログラムは、知識と技術を“情報(インフォメーション)”として獲得するやり方が主流であるが、「リラ・プレカリア」養成教育は、詩編による内的涵養の修練－祈り－が中心の“フォーメーション”教育であり、この実現が、養成教育運営のカギとなると思われる。
④「リラ・プレカリア」養成講座の調査では、内的修練で育まれた意識の流れが、他の講義、音楽演奏、そして、実習にも行き渡り、カリキュラムの全領域に息づくものとなっており、またそれが、実践の場で、目の前の患者と共に在るということに、確かに活かされていることが、実践活動の参与観察とインタビューからも検証された。
その意味において本研究は、スピリチュアルケア実践者の養成カリキュラムの理論面での研究と実践面の機能の統合を検討する一つのケーススタディの意味を持ったことになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 ４ 件）
① 里村　生英、スピリチュアルケア的サービスが死生学臨床現場に組み入れられるための課題考察－「リラ・プレカリア(祈りのたて琴)」の奉仕活動を通して－、第 19 回日本臨床死生学会、2013 年 12 月 7 日、政策研究大学院大学
② 里村　生英、音楽によるスピリチュアルケア実践者養成教育に関する基礎的調査研究－「リラ・プレカリア（祈りのたて琴)」プログラム方針と被災者へのパストラル・ハープ奉仕実践事例を通して－、第 6 回日本スピリチュアルケア学会、2013 年 9 月 15 日、東北大学
③ 里村　生英、スピリチュアルサポートをめざす音・音楽を介したケアサービスの実践報告と課題研究、第 18 回日本臨床死生学会、2012 年 11 月 24 日、女子聖学院中学校・高等学校
④ 里村　生英、ハープと歌声による生の音・音楽で終末期の患者と共に在ること－ミュージック・サナトロジーを応用したハープ訪問―から捉えるスピリチュアルな癒し、第 17 回日本緩和医療学会（シンポジウム 17)、2012 年 6 月 23 日、神戸国際会議場

〔図書〕（計 ２ 件）
①翻訳：J.ホリス著、里村　生英訳、ふくろう出版、エンドオブライフ期の音楽－痛みを和らげ、旅立ちの準備に寄り添う－、2014、296
②雑誌記事：里村 生英、終末期の患者と音・音楽を介して共にあるということ、消化器外科ナーシング、vol.17 no.11、2012、pp.1-2

６．研究組織

(1)研究代表者
里村　生英（SATOMURA，Ikue）
エリザベト音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：９０２３５４３２